THE LADIES' JOURNAL OF EDUCATION.

女學叢誌

驛遞局認可　明治十九年四月十日　毎土曜日發兌　第拾七號

此の繪の說明ハ本紙中ニ在り

The Engraving illustrated in another page.

東京京橋區南鍋町貳丁目壹拾番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第十七號目次

●官報●女學叢談●中外新報●家庭の鑑●東照宮御消息の續き●英語の栞（附羅馬字話なし）●泰西箴諺の直譯●内外列女傳●孝女周氏（表嵩傳）●松田さつ女の傳（前號續）●節婦川合氏●赤染衛門●群芳詞苑●女紅●香道（前號續）●裁縫（一ッ身裁方）●人の面容を美麗になそ法●ワールン氏西洋料理法の飜譯（前號の續き）●稗史小說●英國剪燈情話（第二回の續き）●御伽草●机の塵●和書講義（つれ〲草）

明治十九年四月十日

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區内郵税不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に内規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附わらんとを希ふ○郵劵代用ハ御斷り申上候尚一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割増を乞ふ郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替劵を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區内ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

明治十九年 女學叢誌毎土曜日發兌表

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	壹回分	二回分	三回分	四回分
自一行至十行	八錢	七錢	六錢五厘	五錢
自十一行至二十行	七錢	六錢五厘	六錢	四錢五厘
自二十一行至三十行	六錢	五錢五厘	五錢	四錢
自三十一行至五十行	五錢五厘	五錢	四錢五厘	三錢五厘

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎官報　本年三月廿七日四月二日

○朕茲に帝國大學の職員官等を裁可す

御名　御璽

明治十九年三月廿六日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文
文部大臣　森　有禮

勅令第九號

帝國大學職員官等

總長　勅任(自一等至二等)分科大學長　奏任(自一等至二等)
教頭　奏任(自一等至二等)教授　奏任(自一等至四等)
書記官　奏任(自二等至六等)助教授　奏任(自四等至六等)
舍監　奏任(自四等至六等)書記　(判任)

○文部省令第六號　北海道廳府縣

師範學校の卒業者にして教職に從事する者ハ自今毎六箇月其服務の狀況を該學校に報告せしむべし

但既廢ニ係る官立師範學校の卒業者ハ東京師範學校ニ同府縣立師範學校の卒業者ハ其學校の在りし地方の所屬府縣立師範學校に報告せしむべし

明治十九年四月二日　文部大臣　森　有禮

◎女學叢譚

○中等以下の婦女社會に改良を勸る說

古人曰く家貧ふして良妻を懷ふと嗚呼數百年前既ニ此語あり由りて見れハ家の貧しきを恢復して富有となすハ偏に妻たるものゝ力多きに居るハ今これ始る事にあらず古へより既に然るを知るべし今日海内の形勢を洞觀するに男子にありてハ則ち駸々乎として日ニ月に開明の域ニ進むハ吾人の親しく目擊する所にして敢て贅言を要せざるなり貴夫人にありても亦大ゐに外貌を一變し慈善會の設け等其他世の開明を補助すべきの具一にして止まらず內其學術の如何ハ未だ知るを得ずと雖ども其外を見て其內を推測すれば學術も亦富饒なるべきハ論を俟たざるあり故に姑く論ぜず獨り怪しむ中等以下の婦女社會にありてハ未だ著しき改良法を設け開明進步の補助となるべき企圖あるを聞かざるハ何が故ろや抑國の開明進步ハ婦女の關係する所にあらずと謂て顧慮せざるの然らしむる所歟將た我能ハずと謂て自棄に安んずるの然らしむる所ろ歟今これを推考するに蓋し此二者に非ず中等以下の婦女社會に改良法なきハ多く資財の乏しきに原因するならん夫れ然り然りと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いへども今の時に當り著るしき改良法を設けて其家政を立て施て國家の開明進歩に補助すべきハこれ女の社會の盡す可き義務なるべし吾所謂改良とハ頭髪の形ちを改め衣服の製を改むるの謂に非ず又帽を被り靴を着け舞踏の傳習を受るの謂にあらず中等以下の婦人社會に著しく施行すべきの改良法ハ種々之れありといへども今其第一に着手して之を永遠に保持そべき急務ハ則ち勤儉の二字是なり是れ世人のよく知る所ろ吾輩か殊に喋々するを俟たざる處ろなりと雖ども人只勤儉の行ハざる可からざるを知るも能く之を行ふもの少なく之を行ふも亦之を永遠に保持するもの實に僅少なり夫男ハ出て外を勤め女ハ内を修むるハ本邦故有の制にして今におりても戸々大抵皆是なり故に勤儉以て内を修むるハ婦女の任なり誠に能く此二字を履行し永遠に保持して以て倦怠そることなくば家政始て立ち富亦致すべく隨つて凡百の改良得て施こすべく開明進歩の補助となるべき事業も亦興し得べし是れ吾輩が殊に此二字を以て第一着に提出する所以なり扨此二字を實地に履行し之に亞ぐものハ則ち讀書なり吾國從來女子の教育乏しかりしを以て現今人の妻となりて其齢ひ三十歳前後のものにおりてハ大抵完然の教育を受しものなし（若し完然の教育を受賜ひし妻君ハこの限にあらず）故を以て腦の知覺甚だ狹少なり折角造物者の授けたる貴重の腦力を十分に用ひ盡さずして返すもの多し豈惜むべきにあらずや是れ吾輩が最も遺憾とそる所ろにして此知覺を廣むるの具ハ讀書に若ものなし凡そ著書の出版印行今日のごとく盛なるハ古來未だあらざる所ろ坐して古人を友とすべく居ながら歐洲諸國の風土人情及び百般の事業知るを得べし（我に兒のあるありこの間隙なしと云ひ賜ふな）一年三百六十日一日豈に百字を讀むの間なからんや冀ハくハ中等以下の令閨諸君少しく意を止むる所あれよ此他改良の法方猶少からずといへども先づ以上勤儉讀書の二つを研究せバ他を俟ずして改良ハ得て望むべきなり

◎中外新報

○清國皇帝の后妃　清國光緒帝ハ今玆聖算十五にわたらせらるゝをもて去月廿四日北京の皇城内に於て西太后ハ其の皇妃を八旗滿蒙の宗親中より選擇せられたるよしなれども未だ何某公の女の其位にそなハられしを聞かす或ハ云ふ一品肇公の女なりと後報を待つて記載すべし

○小學生徒衣服改良の旨趣書　此程東京府の學務課にては題號の如き旨趣書を各公立の小學校へ配布されし由今其大要を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

記せんに人智漸く進み世態隨て改まる今日にてハ衣食住を改良して世の進歩に伴ふと肝要なれども就中衣服の製を改めて衛生上にも相適し動作進退にも便利のものとなすと尤も大切なして本邦固有の衣服の如きハ其製概ね懶惰に流れ易く衛生上にも害多く動作進退にも甚た不便を覺え殊に今日小學校に在りて卓に向ひ椅子に憑る生徒の如きハ最も動作に便利なる衣服を用ひざれハ怠惰を催ほすの恐わり又遊戯体操の時にも不便を來たす少からす間々洋服を着るの生徒あれとも概ね大人の服装に倣ふを以て實用に不便を見ると多く却て奢侈の具たるに過きす故に今當課に於て試に生徒用の衣服として裁縫せしめたるに其價も本邦固有の衣服に比すれハ却て廉に恰好もよく男生徒着用の衣服には頗る便なるを覺ゆ將來父兄又ハ小學職員等にて少しく注意をれハ衣服の改良を圖る難からす云々

○圖書博物二館　文部省にてハ去る廿九日東京圖書館幷に敎育博物館を總務局に屬せられたりと云ふ

○白耳義皇帝　同皇帝にハ千八百七十四年十二月十四日學術獎勵上の目的を以て毎年特別に二万五千フラン（凡そ我五千圓）づゝの金額を下賜せらるへき旨を達せられたり而して此金額ハ來る千八百八十九年を期し電氣に關る學術上の進歩發明幷に其利用及ひ經濟に渉る問題の懸賞金に供する事も一定せりと云ふ就てハ右の懸賞文を送致せんと欲する外國人ハ渾て之を同國首府農商務省へ宛送付すべし但し懸賞文ハ獨逸語佛國語英國語フラマンド語伊太利語幷に西班牙語にて記したるものを以てすべく又謄寫文若くハ印刷文を論せず送致するとを得るも印刷文ハ千八百八十五年同六年同七年同八年中に印行せしものに限るべし懸賞文の審査委員ハ皇帝に於て白耳義人の中より三名外國人の中より四名を選定すべし云々去一月十六日の露國ノウオスチ新聞に見ゆ

○博物館　農商務省管理の博物館ハ今度宮内省の管理する所となり同館長心得にハ山高信離氏が仰付られ屬官等も去る一日夫々拜命わりし由

○廣嶋師範學校　全校にてハ去月二十日卒業證書授與式を行ハれ女子師範科にて中等卒業生徒四名同初等卒業生徒五名其他男子師範科生徒の卒業若干名これありしとの事

○孝子　京都府下丹波國天田郡下天津村に奥田佐治兵衛（二十六）と云える一孝子わり其父勇次郎と云えるハ文久元年の頃病死して母親おつるとて今茲六十一になる老婆の手に育成

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

られしが家は素より貧ふして所有の田地もなく人の家に雇はれて漸やく其口を糊する程なればこれを育成るにも一方ならぬ艱難辛苦に佐治兵衞も子供ながら親の心を察しやりとも〳〵農業を稼ぎて明治九年まで暮し來たるに其六月の頃よりしてありつるは不斗中風症に罹りいろ〳〵治療を加えたれど更に其の効なく起居も自由ならぬと十年間に及べども其の間針灸藥餌は勿論のこと食事の介抱大小便の世話何くれとなく氣を注て一日も怠らすこれを見る村の人々も嗚呼感心なり神妙なりと皆譽めざるはなくそれにしても只一人にては中々容易の事にあらねば程能き嫁を世話し呉れんと十七年の頃おいちと呼ぶ女を世話する人ありしが友は類を以て集り肖たものは夫婦とか云ふ諺に洩れそこのおいちもまた佐治兵衞を助けて甲斐々々しく立働き夜の目も寢すに姑を介抱するなど實に奇特の至りなれば北垣京都府知事には先月廿七日を以て其孝を賞せられ金一圓五十錢を下賜せられしと云ふこれを讀む人宜しく以て龜鑑とはなし給ふべし

○小學課程改正　文部省にて今度小學令を發布せられ各府縣小學につきて十分の改良を施さるゝ由にて其改正の課程は略ぼ左の如くなりとか云えり最もこれは尋常科のみにて高等科は別に改正を加えらるゝ由

修身　第一年講義、作法、第二年同上第三年同上第四年同上

讀書　第一年讀方、假名、假名の單語、短句、簡易なる假名交りの短句、短文第二年讀方簡易なる假名交り文、緊要なる字句の書取、作文、口上書類第三年讀方同上作文日用書類第四年溫習

習字　第一年假名、行書、第二年行書第三年同上第四年溫習

算術　第一年珠算、實物の計方、數字算、珠用法及加法、第二年珠算加法、減法、乘法、第三年珠算除法雜題、第四年溫習

地理　第二年簡易なる地理の總論第三年本邦地理の概略第四年溫習

歷史　第三年本邦歷史の概略第四年溫習

○學校移轉　滋賀縣師範學校女子科にては是迄大津市中の或る寺を假りの教場に定めありしが今度公立開達小學校の跡を更に修繕して去る一日同校へ引き移され生徒をも新たに增募されて唱歌音樂の學科を教授し体操をも實施することに着手されし由該地よりの通信

◎庭訓の鑑

○東照宮御消息の續き

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一 我儘にて終に我が願望の叶ふ事決てなき事に候第一我儘ニてハ親を恐れず親に見限られ第二親族にうとまれ第三朋友にうとまれ第四召仕ふ者にうとまれ第五我身の願ふと悉く叶ハず右五ヶ條の通り成行候へバ身を恨み天道を恨み人を恨み後ハ煩しく心亂れ候より外ハ無之候唯幼少より物毎自由にならぬ事を能々心得申度事ニ候

一 大名の惣領ハ格別次男よりハ召仕の者同様に心得候様呉々可被申聞候惣領より次男の威勢強きハ家の亂れの基に候事

一 幼少の節萬事大様に輕きものゝ物いひまねぬ様に心得候事夫も餘りおはやう過てハ却て下の情に委からず慈悲の心薄くなり申候常々の遊びに國々の名産の事或ハ大名の家筋家柄のと幷に家來共もあれハ何の代よりの譜代の者何の節手柄高名いたし候子孫抔と噺し致候へバ幼少より家中の者の如在ニならぬ事共聞覺候故成人の後自然と仕置行届申候大名の自身に嗜み候事ハ弓馬第一鎗長刀釼術も心得可申事心得なくてハならぬ事に候

一 學問ハ大名ハ自分博學になり候にハ及ばぬ事に候學才ある者に常々其道の講釋承り其外物の義理善惡の事を尋古への善人の行義作法名將忠臣の物語佞臣の主の心をくらまし其國を亂し代々の國郡を失ひ候事ども常々承り置我身の曲尺ゆがまぬ様に心懸候事第二に候兎角人の道ハ五常を守るに止りて其外に我身の鏡なくてハ何事も知られぬものニ候常の鏡とて違ひ外より磨事ハなく我心を心にてとぎ立申候事にて候我身の行ひの惡しきハ鏡のてらざる故にて候まゝ其曇らぬ様に致し候事ハ常々身の行ひの善惡を人に尋るより外ハ無之候惡を聞事を悦び其座ニ其惡を改先善をなし候者へ褒美を遣し召仕候へば次第に鏡ハ照し身の善惡ハ其席にて知れ家中の善惡民百性の取沙汰居ながらしれる事にて候身の善を聞事を好み候へば佞臣氣に叶ひ候事斗いふ様に成行身の惡を聞く事を悦べば忠臣日々に進み忠言を時々聞く事ハ一身の行ひにて天地の道にかなふ事に候此所主たる者の第一の嗜ミに候召仕の者利口にて氣轉者斗が氣に入召仕候へば其所より佞臣の取入所にて候何事もにぶく候とも正直なる者を撰み召仕候事第一の事に候井伊兵部事平日言葉少く何事も人ニ云せ承り居氣重く見え候へ共何事ぞ了簡決し候へバ直に申そものにて取ヒけ我等の何ぞ了簡違ひか評議ちがひの爲にならぬ事ハ皆人の居ぬ所にて物靜に善惡申そものにてハ夫故後ニハ何も先内談をいたし外へ申出す様ニ成申候

（以下次出）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎英語の栞

MAXIMS & PROVERBS.

泰西の箴諺

Let those who stand, take heed lest they fall.

㊅(十二)㊀㊄㊁㊃ ㊂ (十一) ㊉ ㊈、㊆ ㊇

〔意譯〕立つ時は轉ぶことを思へ

KYŌDAI TAGAINI AISUBESI.

Futari no kyōdai no-hara ni asobi itarisi ga, futo, kotori no ko ga su no naka de, naniyara tsutsuki-au yōsu wo mite, otōto wa kore wo ayasimi, "ano ko wa nani wo site iru no de arō" to iu wo kikite; ani wa, "sōsa, kenka wo site iru no d'arō" to ieba; otōto no iu yō " dattemo kenka jā arimasumai, are wa *kyōdai da mono wo*," to.

Si ni iwaku; " kyōdai sitasikusi to tomoni oru wa ani yok'arazu ya, ani tanosik'arazu ya ?"

○泰西箴諺の直譯

㊀夫れ等㊁其の人㊂立つ㊃所の㊄夫等(を)㊅使㊆彼等(が)夫れ等其人を指す㊇轉び㊈爲さぬ爲に㊉愼之(を)(十一)取ら(十二)使よ

◎内外列女傳

○孝女周氏　(表善傳)

孝女周氏と云えるは淸國天門縣の人にして其の父はもと大學の生徒より登用せられ官職に就きて何不足なく暮し居りしも兒と云ふものは周氏の外絶えて男女ともあらざれば特さずくなくつねぐ母とこの事をのみ語り出でゝ終身の恨ミと歎きけるが或る日のこと周氏はこの話を側にありて聞き込みつこの時齡いまだ九つの幼女ながら父に向ひて云えるやう阿爺よ阿爺の玄きりに男兒を欲しがらるゝは必竟老を養なふの計をなされんとての事なるべしさらば兒にては惡かるべきか倘し惡のらずば兒男兒の職に任じ他家に嫁ぐのことを止めて身を終るまで御兩親を養ひてんと聞く父母は周氏の年なほいとけなくて言葉さえ片口交りにありければ何云ふやらんと聞き流し戯れにうち首肯きてうべなひし樣示せし處其の年たくるに及びても尙はこれを實と信じ面貌のうるはしきに婚姻を勸むるもの多々れども絶えて嫁くことを欲せず父母もまた女としていつまで生家にあるものならねば孰れか心にかなひしところへゆくこそ其方の爲なるべしと利害を擧げて曉諭せども

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

毫其の言を聽入れず泣きて父母に云えるには兒九齡のときなりけん阿爺は兒の請を允し給ひて一生涯家に置くとぞ宣ひたれさるを今に及びて變替さるゝはいかゞの譯にて候や兒は最早死より外なしと意色兩ながらに決したるの狀勢なれば父母も其の言を強る能はず志の切なるに感服しぬこれよりして周氏は專ら家政の事を司り簿書の筆記金錢の出納となまれ井々として男兒の逮ばざるところあり父母も幾んど其の女たるを忘れしごとくまた父母の病める折には周氏自から其の股の肉を割り取りて丸藥を製してこれを薦めて其の病を愈そことも屢ばにて其の孝世間にかくれなく縣令も具奏してこれを賞せられし程なりしが父母歿命し後は親族中の長たるものにはかり親族中の賢と稱せらるゝものを擇びて家の嗣子と定めおのれは翠の黒髮を惜氣もなく剃り落して尼となり一の菴を結びて一生佛に仕へたりとなん世にも稀なる孝女とや謂まじ

本編の記者云ふ前號に武昌縣奇女子の事を投寄せし人ありいまだ結尾に至らざるに其續稿を送らず甚だ遺憾とする處なり故に今其篇を記者に於て續かんと欲それども事實に於て或は誤を生せんを恐れ敢てせず更に該篇に稍似たる一譚を得たればこれを次號より稗史小說欄内に掲けて該篇の續稿に代ゆされども事決して虛にあらず只た其書きぶりの小說体なるが故に同欄内に出すことゝなせり看官請ふ恕せよ

○松田さつ女の傳　（前號續）

撿使の人々書を披き見るに其書はうるはしき筆にて

御二人樣愈よ御機嫌能御坐遊ばし御嬉しく存上まゐらせ候まつ〳〵申上候私事何とも一分立がたき事御坐候て自害致候其譯は申上度御坐候へどもさつへ夕そきとおしに物語いたしまゐらせ候おまし〳〵申上候ては御歎の上の御腹立を重ね候樣に成まゐらせ候ゆゑ文には申上ず候死ぬ程の事御坐候へは能々の事と恐れながら思召やり被下べし御奉公の内も御恩の事少しも忘申さず百万に一つも御恩送り不申これのみ草葉の陰にてあろ氣に掛りまゐらせ候必々おん歎き遊ばし被下間敷候只々前世の約束と思召あきらめさせられ罪の程も輕くなり佛果の種にも成候樣に逆なる事には坐候へども御供養遊され被下かしと最早此譯おしつけ申參り候はんと存候まゝ左樣思召御恩の上ながら宜き樣に御執計ひ見苦からぬ樣に被仰付可被下候さて文庫の中に十四五色も小道具御坐候まゝ夫々に御見分遊ばし遣はし可被下候此中に妙壽院樣御ながらへの折下され候地藏樣と紙包あげまゐらせ候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

おともじ様へ上させられ可被下候九重の御守懐中鏡ハ朝夕御前へ出候時殊に私の顔をうつしいまゝ御逢遊ばされ候思召にて御覧可被下候必々おん歎きの種と思召被下間敷候三五郎へハ殿様より戴き候御香合御鼻紙袋遣し度おみやへハ奥様より頂きまいらせ候かんざし子安貝遣し候まゝ成人の後姉を思ひ出し候へと遣ハされ可被下候下谷の伯母様始め仁右衛門様半兵衛どのおつせ抔其外皆々様へ御暇乞仰られ可被下候小田原の叔父様へも御忌かゝり候儘定めて仰遣され候はんと存まいらせ候其折から養閑様へ此観音様の軸の物遣され可被下候叔父様へも亘殿へも何成とも少づゝ御わけ可被下候本所の乳母へ此金袋封の儘被遣可被下候私幼き時にいとしみもりたて呉候まゝ垢付たれバ是も遣し度候へども假の事故さつへ斗り遣しまいらせ候是さえ道の程如何と案申候何方様へも心の程にハ難成御坐候乳母ハわけて歎き候半と今見る様に思はれまいらせ候其外どなた様へも御暇乞能々頼上まいらせ候さつともかやうの事夢にもしらずこのふみ御讀遊ばし候ハゝ初て驚き候はんと存まいらせ候年月の内念頃にいたハり呉候まゝ能々被仰可被下候いつ迄書候とも盡せぬ御名殘もの御暇乞斗りと申殘まいらせ候不孝者とて御父様おん叱り遊ばし候ハんと存上候へともさぞめて業因と思召被下候様に幾重にもれんわび遊ばし可被下候思ひまうけし事ながら今ハになり涙に目もくれあとさきもしどろに見えわかず候まゝ早々申上まいらせ候かしく

おかもじ様
おん元へ　　みちより

撿使の人々ハ一見し畢りてみちの自筆なるやとたづぬるに全く自筆に違ひなき段明白なりと申せしかば外に遺書もなし只枕元に祐天の名號を掛け香を焚き短冊に一首の和歌を詠じて

藤の花長き短かき世の中にちりゆく身にぞ思ひ知らるれ

卯月三日　　岡本氏道　生年二十一歳

とあるのみなれば人皆な坐ろに涕を催はしけり（以下次號）

○節婦川合氏

朝倉義景の家臣なりける鳥井與七郎の妻川合氏と云へるは誠に貞節たぐひなき婦人にして主人義景の織田信長のために滅されて其の城の沒落するや良人與七郎も討死なしたのむかたとて渚こぐ海士の小舟のかぢを絶え行衛もいづこと定めなく只ある村落へ落のびて深くも身をば隠しつゝまた回覆のときもあらんとはかなきことをたのみにて潛み居たるに信長方ハ勝は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

こりたる事なれば足輕どもに至るまで虎の威を假り勢つよく村々落く々を剽掠しけるが遂に川合氏の潜み居たる村落をも剽掠し來たり川合氏の年紀なは弱く纔に二八ばかりにして鄙めづらしき美人なるに見過しがたくてやにはにこれを引捕へ已がむくつけき貌にも恥す強て心に隨はしめんとはかりたりしも川合氏の貞心はもと石にあらそいかで轉ばそとの相なるべきぞまたこれ席にもあらざれば捲くことかなはぬ堅固さよ今は口說くも無用なり手ごめになさんといきまきつゆるせ〳〵と泣きさけぶをなさけ容赦もあらゑびすむらがり來りて一軒の空舍にこれを誘ひつ疊もあらぬ菅薦の上に押し据へ今は早や乱のふるまひに及ばんとする勢

二百六十九

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なるに所詮遁れ免るゝ事もかなふまじと心に定めて涙を拂ひ莞然笑つて云えるやうハ世にも妾ハ類ゐなき醜女に生れいでたれども其を嫌ハれずにかくまでも戀慕ハるゝハ妾の身にとりいかばかり嬉しき事になんされども家に老母ありさぞや妾の在らざるに歎き居らんと思ひにければ今迄女々しく泣き入りたれど今ハ其の事あきらめて只心次第に任せ侍れば何卒暫ばし猶豫して妾に紙筆をかし玉へ老母の許へ一封の書を遣ハし置んとて事の次第をさら〳〵とかき認めて袂に入れ廁にもくと偽りて竊かに裏口より逃げ出し古井のあるに身を投げてあハれ果敢なくなりにけり足輕どもハ今來るかと待詫あるにドンブリと身投げるをとの聞えしかば驚きつゝも趨り出直ちに救ひ上げたれどももとゟ生るの心なく身を投けたるにあるなればいかに介抱なせバとて蘇生するの見込もなく〳〵死骸を打まもりて歎息の外なかりけり既にして足輕どもハ其死骸をかたづけんとするに臨み其の手に一封の書を握り居るを發見せりこれぞこれ死するの前老母の許へ送るとて紙筆を請ふて書たりし書にして中に左の和歌あり

世にふれハよしなき雲も覆ひなむいさ入てまし山の端の月

これを見これを聞きつるもの皆な其の貞節の非常なるを憐れみ覺えず涙を催はせしとなん

○赤染衛門　中古女房十五人小傳第二　橘　道守稿

赤染衛門ハ平兼盛の女なれど衛門が母ははじめ兼盛に嫁きて此人を産み後赤染時用の妻となる故に後の親の姓によりて赤染といひ時用右衛門の志尉を歷たるによりて衛門とハ稱しゝ也初め上東門院の御母倫子の方の女房なりしが後に上東門院に宮仕遂に大江匡衡の妻となれり時に宮中男女の歌人多き中に赤染衛門和泉式部とてとりどり沙汰せられしハ名譽といふべしある時衛門が子擧周和泉の國の任はて上京する折しも重くわつらひしが住吉明神の祟なりと聞て取敢すみてぐらに歌書て奉りしかば明神納受ましましけん其夜病おこたりにけりと諸書にあり是實に鬼神を感せしめたる也此人歌の上のみならず其才の勝れたる事ハ公任卿才學優長なる人に己が辭表を書かしめしに一つも意に適ふなし後匡衡に囑す匡衡諾し家に歸ると其考案に苦ミ愁色あり時に赤染傍に在て曰く公任卿ハ由ゝしく飾慢ある人なり君宜く其祖先の功烈を擧け而して今沈淪する事を書くべしと匡衡其意に從ひ辭表の冒頭に臣ハ五代の太政大臣の嫡男亡祖忠仁公と次第に數へ上げ而して今沈淪の情を記して示せしかば卿大に感賞し遂に其表を上りきと清輔

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

朝臣の袋草子にあり是にても詞藻の才のみあらぬを知るべし

◎群芳詞苑

○河邊柳　疋田　孝子

河風によられてむすふ青柳のいと面しろき波のあやとた

○同じ題　富澤　高子

打のぼる佐保の川邊に一村のけふりとみしハ柳なりけり

○同し題　橘　禮子

淀川の堤またてるふし柳ふしたるまゝにまゆつくりけり

○同し題　同　道守

花さかぬ隅田川原にみやこ人つなきとめたる青柳のいと

○同し題　木村　重延

さちそむる春の霞の衣かはやおきの糸にぬふべかりけり

○餘花　盤城　鈴木まる子

戀しくハ尋ねもこよと奥山に春をのこして花のさくらん

○春の歌の中に　西京　櫻井さた子

梅ハちり櫻はまたき春の日をときとや桃の花のさくらん

○觀櫻國字詩アカサタナの韻　番町　藤田はる子

四方のけしきを見渡せバ　木々のこずゑに爛熳と
咲き乱れたるさくらはな　叢雲と見擬ふばかりにて
そよ吹く風に散るさまハ　冬のあしたにふる雪が
嗚呼うるハしの景色ぞや　實にも樂しきとぞかし

○同チコソトノの韻　同し人

長閑けき彌生の春の日を　我ものかほにさくらはな
いまを盛りと咲きつるも　若しや今宵にかせふかば
明日をも待すはらくと　散りて果敢なく成ぬらん
嗚呼いたわしの風情ぞよ　さても是非なき事ぞかし

○春夕絶句　采蘭女史

窓風料峭襲衣寒。剔盡春燈夜欲殘。月到梨花人不識。香雲吹影落欄干

評綺麗無匹

◎女紅

○香道（前號續）

名所香　競馬香　矢數香　源氏香
三炷香　住吉香　舞樂香　草木香
四町香　烟争香

以上十組ハ中右よりある組香にて香道瀧の糸に載するもの也

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

花軍香　古今香　呉越香　三夕香
蹴鞠香　鶯香　六儀香　星合香
闘雞香　焼合花月香

以上十組ハ秋の光に載そるもの也

十炷香試わる者ハ宇治香　宇治名所香　異住吉香
常に用ゆ

異花月香　新古今香　續古今香　烟競香
雪月花香　異雪月花香

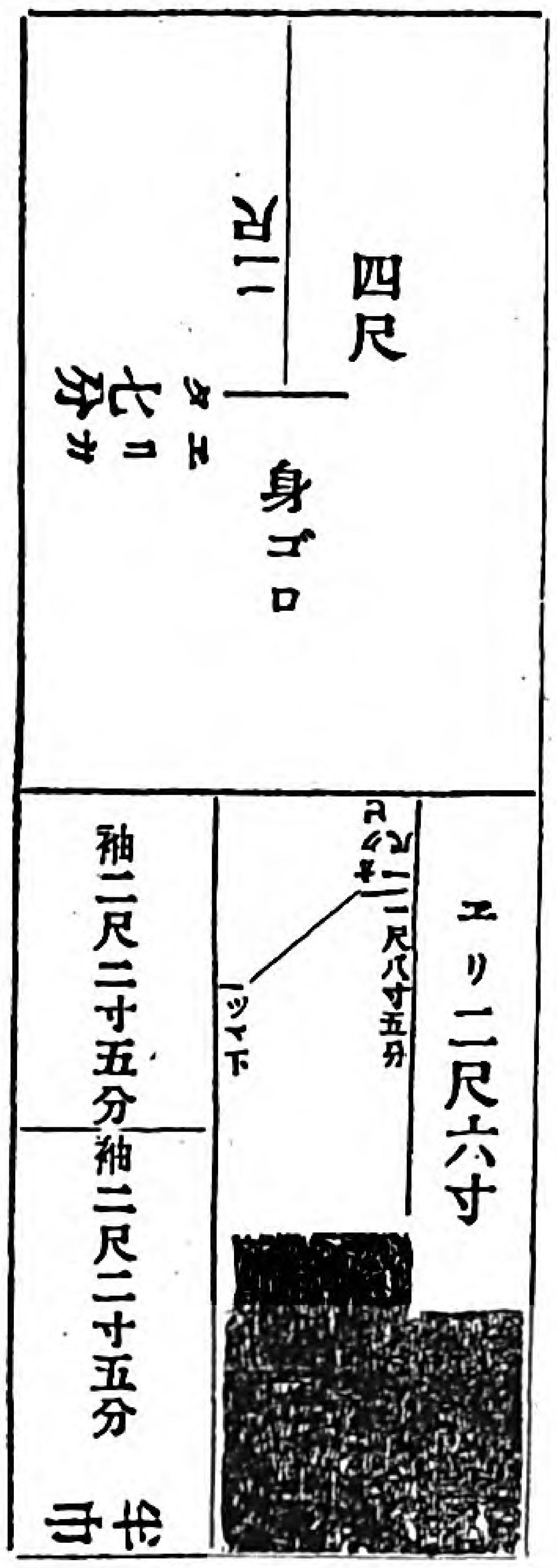
以上十組も中古よりわるもの也

（以下次號）

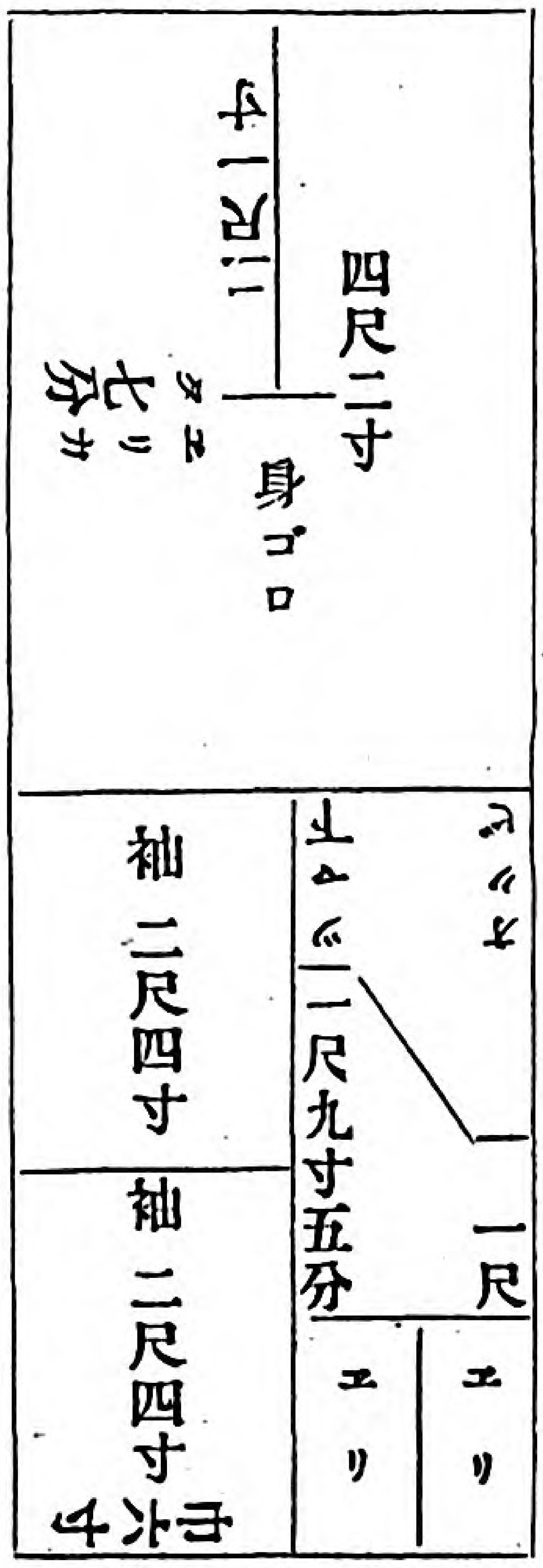
○裁縫一ッ身裁方

長サ八尺五寸巾九寸五分の切まて丈二尺袖一尺一寸二分五厘のものを裁つとを得べし

右圖左の如し



又大阪裁と云ふもわりとれハ長さ九尺巾九寸五分にて丈二尺一寸袖一尺二寸のものを裁つべし其の圖ハ



○人の面容を美麗になる法

面容を心まかせ美るハしくなさんにハ白瓜仁冬瓜の五両白楊皮二両桃花四両この三味を細末にして食後ま一匕づゝ日に三度服すべし又面色白からんとを思ハゞ瓜仁を増そべし紅ならんと思ハゞ桃花を加ふべし久しからす美人となると云ふ

○羅紗杯の油汚を拔く法

羅紗杯の油汚は薄き「ポッタース」水にてぬける也併し或ハきづのつく事あり故に油汚の上にブロッチングペーパー即ち吸墨紙をあて其上に火斗をかくれば能ぬける也皆さん試み給へ

○ワールン氏西洋料理法の翻譯（前號の續）

右の各部の内焼肉となすまハ肋肉或ハ腰肉を撰ぶべし肋肉を買入るゝ時は中肋をよしとす又腰肉を買ふときハ後部の方を撰ぶべし後部にハ腿肉わりて都合よし美食家ハ腰肉なも脊肉を好むと雖も平常の料理まそわまりに過大ましして不便利なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

多數の暮し向き又ハ召使のものゝ食事等險約を主とそるとき
ハ後股肉を用ゆべし此部にハ骨なくして肉汁多く且つ他の部
分よりも廉直なるか故に燒肉にて最も適當せり丸肉及び弓形
骨部の肉ハ煮物となし或ハ鹽漬となす時に用ゐ頸肉ハソップ
となし臀肉ハ油煎等に用ゐ又た蒸、プッディング、パイ等に用
ゆべし

犢肉ハなるべく小さくして白色を帶び腎臟の周回に脂肪多き
ものを最も良肉とそ犢肉をなそ小牛ハ生れてより八週間十週
間位ひを最もよろしとす是より古き牛の肉ハ甚た硬し又同じ
日數の牛にても小体なるをよしとす大なるものゝ肉ハ美味薄
し總て犢肉ハ乾きて肉理細美ょ肉色白きを要す若し濕り氣あ
りて粘膠ある時ハ決て使用すべからず

(以下次號)

◎稗史小說

○英國小說 剪燈情話　(第一回の續)

山橋村排士遇友　禮拜堂非利成親

非利ハ答へて云ふ否な々々女ハ遠く家を離るゝょ能ハざれバ
必ずしも他しをて此脚色を知らしむべからず伯叔世を逝るの
後之を明言そるか或ハ他日他の光景を看て彌よ女子の賢美に
して招聘てもよろしきを察そるの狀あらば其機會に乘して云
出すも遲きにハあらず只た今日の處ハ君一人之を知り居るの
み我此地にある土人ハ都て認識ねば禮拜堂を借りて公然婚禮
を行ふも君の幸ひに我か姓名を包み呉れば事露れ敗を取るの
虞もなしと排士ハまたも沈吟して我が愚見に依れハ老兄が這
事をなそ實に危險の至りなり宜く思ひ止るべしと異見に非利
ハ辱けなし君の美意ハ承ると雖も奈何せん事早くも定まり居
れバ只我が請ふ所ハ成婚の禮を君親から代行なふの勞ょあり
且婚姻の式を行ふにハ禮に照して兩個の証人を要すれバ一人
ハ我が從者をもて充つるも可と雖も他の一人ハこれなきをも
て我れ之を君に托して本鄕中の一正直人を覓めてん而して婚
禮相濟むの後ハ我從者にハ銀を與えて遠き域に立去しめ正直
人の如きハ如何樣にもなし易すからんと聞いて排士ハ打點首
老兄の計策誠ょ妙なり我君に代て勞する事ハ敢て辭せざるも
惟た恐る此の事と言の畢るを待たすして非利ハ嘴を挿み事已
に決定す最早再び談するを要せす敢て問ふ君の近來の行止ハ
如何と排士ハ長嘆一聲して眼に淚を浮べ更に答もあらざれバ
非利ハ重ねて一壜の酒を把り相勸めて排士を慰さめ這事の成
就せし後ハ我れ必す報酬を厚うすべし決して空拳を揮はしめ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すと談話夜分に至る看官須らく想ふへし這兩人ハ是れ垂髫の交友相別るゝこと爰に十年而して一夕相逢ふいあで十分の歡を暢し喜を盡すを得ん次日も早晨より重ねて婚禮の商議をなし非利ハ再三叮寧に依賴て其の期を約し別れ去れり其後暫く此話も絶えて幾多の月日を消過り吉期已に到りしかバ非利ハかの女子を携えて山橋に到り小禮拜堂に於て結婚せりされど鄕人もこれを知る者罕なり原來この女子ハ是れ何樣の人ぞ蓋し英國にてハ規矩良家の士女も常に相往來して嫌忌あるとなく名勝の地方以て同往遊玩すべく靜雅の樓臺以て同往宴樂すべし而して其の兩親が若し能く士女の心情を曉得るとあれば適當の人と聯姻するなり但し玆に一層の美事と云ふべきハ未だ婚を成さゞるの士女にして斯く同車並轡履舃錯ると雖も決して曖昧猥褻の行ひハあるとなしこれ家主の却て防範を設けすして遊行自在にする所以にころ却て說く女子ハ名を愛格と呼び父親ハ舖を開きて貿易に從事し居れり女子ハもと世家大族に生長し性情聰明姿質艶麗眞箇に一個天生の尤物なれば非利ハ他の家と相隣り少さき時より其の面を見知ありて愛慕の意思を生しこれより常時往來して兩人ともに猜忌するとなく他の父親も亦た其情形を看取りて深くも非利を愛すれとも門第の相當せざるをもてたゞ好事の成難きを慮かるに過ざりき然るに一日非利ハ馬車に駕し來りて愛格と海濱に到り奇景を見んことを約したるに愛格ハこれを父母に告げ非利と同しく車に打乘しがやがて其車ハこれまで見も識もせざるの逕路を過きゆくにぞ愛格ハ危疑百端車中にありて細かに非利に問ふ非利ハ遂に隱さす語るにさきの日山橋に到りて成親の事を計議せし顛末を以てし一々說聽せたれば愛格も驚きしかど事已にこゝに至り又奈何ともすべきなきを知り淚眼愁眉勉强て婚禮をなすとを約す其の內其車ハ一鞭早くも已に排士の門口に着き御者一跳車を下りて車窓を開きたれば非利ハ愛格を抱きてこれを下り嘻々然旁に立ちて肩を並べ去る但し愛格ハ始終默怨暗愁淚衣衫に點じけり

（以下次號）

○御伽草

○頭に眼

或る寺の和尚さんが一日碁好きの客をよびて一面打ちはじめたるに好きこそ物の上手なれで客ハ隅地面もどこも悉く取圍みたれバ和尚さんハ殘念云ハん方なく一ッの隅なりとも生さんと頻りに眼をこしらへるとに工夫し居る折りしも頭頂の上

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に蝿がたかりうるさしとて石を持ながら頭を掻きこの邊に一ツの眼を得たらば大方生るであらふ

評頭上又得二一眼一是レ爲二三眼入道一

○美酒を夢む

前の酒泉縣の斗酒博士圖部六候酒井飲之助樽次とも稱すべきほどの酒好が或る日二日醉の氣味にて仕事も休み鉢卷しながら打臥しありしに忽ち夢に一樽の美酒を拾ひたれバ其の悦び云ハん方なく飲まぬさきからはや舌打してア丶甘露々々コーツ拾ひ物ハ警察署へ届るが當然なれどソコが上戸の忍びぬ處でまづ一盃やらかそうの併し同しくばかんをつけて飲む方がよろしからんとかんを付んとする時正午のドンがすさまじい響をして聞へたるに驚き醒れバこれなん夢にて上戸殿も大に殘念がり鳴呼冷で飲めバよかつた

○西洋謎

太陽天に中して四六の半數を示めし人の口腹を養ふの機を促して大喝一聲懶惰者の睡を攪す其の性質甚だ堅固にして世間穏かなるさるの時よハ忽ち進み出て〻偉功を顯すと雖も常にハ鬱々一城裏に住むを以て毎日一回不平の氣を洩すものあり知らす何者ぞ

○謎

いくぢなしの喧嘩とかけて月の隠れし夏の空と解其心如何

新聞とかけて知恵の早い小兒と解く其の心如何

○考へもの

癸よ三字名の一物あり中の字を省きて上下と合それば桶の如きものとあり上を省けバ子の子となり下を省けば寶器となる

○第十五號燈謎謎考へ物の解當者ハ左の如し

（燈謎）（第一硯）番町鶴田清姐下谷赤松氏（第二凧筝）番町鶴田清姐

（謎）（よめかねる）番町藤田治姐下谷赤松氏鶴田清姐本所山下兼姐京橋堺美代姐築地溝口久姐

（考物）（第一マッチ）藤田治姐鶴田清姐堺美代姐（第二兎）藤田治姐鶴田清姐溝口久姐芝露月生山下兼姐

◎机の塵

○めでたくかしく

今女の文にハかならず終りにめでたくかしくとかける事定まれる事なりいつの頃より乞か書きけるにやされどもめでたくと云ふ詞を消息にいへるとハ源氏物語總卷の卷などにも見へ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

たればふるきことなりかしくと云ふハむかしの假名文にあなかしこといへるかしこと同語にて俗文の恐れながらなどいふが如く男の手紙に恐惶をかけるよ同し意なりめでたくかしくといふ詞ハ一休ばなしに睦月とて都の町よ松立わたし注連縄かざりして祝ふをりからされ頭いただきありきたまへるを或人の見てこれいかよと申しけれハ返し事に

悪けなき此され頭あなかしこめでたくかしこ是よりハなし

とありこの歌正しく一休和尚の詠ならばこの詞の古き證とすべし

○杜若

世の人杜若のかきつばたと覺へて燕子花のかきつばた成るをしらぬが如し杜若ハかきつばたにハあらざるなりと柳里恭のひとり寝に見ゆ

○女の習字

女ハ男の手を習ふべし女の手を習ひたらんにハわがること難かるべし男ハ女の手をしたひて書くべし物かくにうつくしからんと思ふべかゝらす

○塩梅

上古ハ味噌もなければ醤油もなし酢もまたなかりしかば塩と梅とをもて味をつけたるなりゆゑに今にいたるまで塩梅とハいひるとぞ

○箸

箸のこと昔ハ細く竹をけづり出げて其の両端をとりて丸くなりたる處ろにて物をとりて食ひしなり今も神に供へる箸ハ此の制にすることとなりハシ——の訓ハ鳥の嘴の訓なりと古老物語よ見えたり

◎閨秀新品

今回舎中評議の上閨秀新品と題し我れより問題を出してこれに答ふる嬢々諸君の俳歌詩文ハこれを群芳詞苑の中特に一欄を設けて掲載し數學の答式をも亦この内に填め以て女學の進歩を江湖に表し且つハ後進誘導の一端に供せんと欲す世の閨閣の才ある人ハ一篇の投書を吝む勿れ但し投寄の上掲載ある分に限り一册を進呈すべければハ國名町名番地幷に姓名年齢とも細かに記入あれ

和歌題　立春霞
俳句題　野遊
詩題　春興　五七言いつれも随意

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文題　探梅記　和漢文共随意片假名交り ハ三百字を限る

數學題

我か雑誌ハ大に江湖の好評を蒙り毎土曜日の發兌三千部に至る尤も此中千五百部ハ定價の八がけにて賣捌くものなり今一年に土曜日五十二日あるとせば其一年の賣得金ハ幾何なるや

和書講義　つれ〲草

第十段　橘道守

家居のつき〲しくあらまほしきこそ。假りのやどりとハ思へど。興ある物なれよき人ののどやかに住なしたる所ハさし入たる月の色も。一きはしみ〲と見ゆるぞかし

〔全旨〕これ世人の家作る心得をさとされたるなり

〔語釋〕家居ハ　住むへき家なり●つき〲しくハ　人の心に叶ふやう付のよきなり●興あるハ　心に喜ハしきなり●のどやかハ　物さわかしからす靜なるとなり

〔講解〕此世ハ假りのやどりとハ思ひながらも心に叶ふばかりに作りたる家に住みそるハ面白しいはんや高貴の人の彼の是のと物好みハせで其の程々に作りたる家に名利を離れて心すまされたるハ平常見馴れたる月の光も一段感情深しとなり

いまめかしくきら〱かならねど。木立ものふりて。わざとならぬ。庭の草も。心あるさまに。すのこ。すいがいのたより。をかしく。うちある調度も。むかしおぼえて。やすらかなるこそ。心にくしと見ゆれ

〔全旨〕こゝハ家作のさまの善き程なるを擧けたるなり

〔語釋〕いまめかしハ　當世風なり●きら〱かハ　花美なる也　わざとならぬハ　天然のまゝなるとなり●すのこハ　簀子にて椽側の事なり竹を籍たるがもとにて板敷なるをも通ハしいへり●すいがいハ　透垣にてあらく結ひたる柴また竹の垣を云●をかしハ　もとほむる語なるか轉りてハ面白く興ある事にいへり●調度ハ　道具のと●こゝろにくしハ　慕ハしく思ふとなり

〔講解〕當世風に花美にかざりてハあらねど庭の木草も自然と趣きあり簀子透垣も其所を得座敷にある道具も古風なるハ何となく住む人の昔ゆかしくしたハしとなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

十九年四月十日發兌團々珍聞
第五百三十九號目錄

- 洒性說　太虎の現出
- 珍報　種々○當世三馬鹿の内○養生放屁
- 狂畫　百都々○新案落語焉馬調
- 和漢欄　當世水產博覽會
- 出放題　狂詩歌句々逸
- 英和對譯　理字書弁新題
- 内外奇譚　親切沢鹿○欲張官員
- 一週要報　滑稽濵車毛　第八回
- 　種々○東京各新聞新說表

發兌所　東京神田雉子町　團々社

但壹部定價金六錢十部以上ハ割引ノ事東京府市外ノ遞送ハ壹部ニ付郵稅壹錢ツヽ別ニ申受候事

中村敬宇先生序　湯目北水先生編纂
○歐米女權　全壹冊　定價三十錢　郵便稅四錢

東條竹翠著　繪入かなつき
○婦女庭訓の眞鏡　全壹冊　定價三十錢　郵便稅四錢

七條峯太郎編輯　鼇頭作文要用字類
○女子必携女子作文楷梯　和製中本全壹冊　定價金貳拾貳錢　郵便稅四錢

馬場壽先生著
○啞鈴體操新法　美本全一冊　定價金十錢　郵稅金二錢

滑稽新話明治流行うそ八百　漢馬融撰　木板手刷　壹冊正價二十錢　郵稅四錢
○忠經旁釋　日本佐藤梶先生旁釋　正價拾錢　郵稅四錢
○明治英名傳　正價金三十錢　郵稅共
○人命保險人間長壽法　正價郵稅共三十錢
○淸國漫遊誌　正價金四十五錢　郵稅自便

東京大賣捌所　續文舍

發行所　東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　續文舍
持主兼編輯人　松本義弘
印刷人　初鹿野錦五郎

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地	大賣捌所	修正堂
同　神田區淡路町	同	巖々堂
同　神田區雉子町		團々社
同　日本橋區新葭町		良明堂
同　牛込肴町十七番地		活神堂
同　芝區愛宕下町二丁目		高槻堂
同　蠣殼町貳丁目		信文堂
同　本郷區本郷元富士町二番地		盛春堂閣田
同　本郷春木町貳丁目		解明堂
同　神田區佐柄町廿一番地		東海堂
同　牛込區牛込神樂町		積善舍
大坂府備後町四丁目		岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目		立眞舍
藝州廣嶋大手町一丁目		早速社
江州彦根西内大工町		新々堂
陸前國仙台大町四丁目		木村文助
越後國長岡裹壹之町		大橋書房

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY